2010 ワールドカップ南アフリカ大会のゲーム分析
―有効攻撃に関する考察―
The game analysis of 2010 FIFA World Cup South Africa
-Consideration about effective attacks -

1K08A121-3　杉浦　雄貴
指導教員　主査 堀野博幸 先生　副査 石井昌幸 先生

【目的】

本研究では，2010 年 FIFA ワールドカップ南アフリカ大会の攻撃シーンの分析をすることにより，近代のトップレベルのサッカーの攻撃の特徴やパターン，傾向を量的かつ質的に明らかにし，そこから導き出される近代のサッカーにおいてどのような攻撃が有効な攻撃やゴールを生むのかについて考察することを目的とした．

【方法】

1．研究対象

2010 年 FIFA ワールドカップ南アフリカ大会の全 64 試合で有効な攻撃と判断できる攻撃シーンを対象とした．

2．分析手続き

DART FISH Team Pro（ダートフィッシュ・ジャパン）を利用し，日本国内で TV 放送された 2010 ワールドカップ南アフリカ大会の VTR から有効な攻撃と判断できる映像をもとに分析を行った．

3．分析項目

攻撃の終わり方を 3 つに分類し，独自に設定した攻撃の方法 11 項目，設定した．

【結果】

2010 年 FIFA ワールドカップ南アフリカ大会では「パス」攻撃でのゴールが 58 回，有効攻撃が全体の有効攻撃の 34%と一番多かった．ついで「センタリング」攻撃であり，ゴール数は 33 回であった．「ドリブル」でのゴール数は 14 回と少なかった．「センタリング」において全有効攻撃に対するゴールの割合が 6%で，シュートシーンが 28%であった．シュートシーンの内訳としてはシュート（枠外）が 61%であった．パス本数は「パス」，「ドリブル」攻撃よりも多く，攻撃時間も同様であった．全有効攻撃でみると「ドリブル」はゴール回数，有効攻撃回数も「センタリング」，「パス」に比べて少ない．しかし，「ドリブル」攻撃での有効攻撃においてゴールシーンとシュートシーンの割合は 5%，74%ととても高いものとなった．攻撃時間とパス本数に関しては「パス」，「センタリング」攻撃よりも少なくパス本数では約 1.5 本少なく，攻撃時間では 3 秒以上短い結果になった．「パス」による有効攻撃は全有効攻撃において特に特質するものはなかった．しかし，パスの種類別で見たときに DF 表へのパス攻撃が DF 裏へのパス攻撃に比べ，パス本数が約 1 本多く，攻撃時間に関しては約 3 秒長い結果となった．

【考察】

「パス」攻撃での有効攻撃とゴールが一番多かった．ついで「センタリング」攻撃であり，「ドリブル」は少なかった．全体を通して見ると「ドリブル」攻撃はゴール数と有効攻撃の回数と割合は低いものの，ボールを奪ってから「ドリブル」攻撃を仕掛けた時の有効攻撃とゴールの可能性は高い．「センタリング」攻撃は相手ディフェンスの守備組織と守備ブロックが整った状況で仕掛けることが多いと考えられ攻撃に対するパス本数と時間が長いことがわかった．「パス」攻撃だが，パス攻撃全体でみるとゴール数と有効攻撃の回数と割合ともに高いものとなった．パスの種類別で着目したときに DF 裏へのパス攻撃はボールを奪ってから，相手ディフェンスの守備ブロックが整う前に少ないパス本数で素早く仕掛けることでかなり有効な攻撃になる．しかし近代サッカーの守備組織、守備ブロックは強固であり DF 裏へのパス攻撃を素早く仕掛けることがやや難しい．そこでボールをしっかりとポゼッションし，パスを回しながら相手ディフェンスのミスや隙間，ギャップを作りシュートすることでゴールや決定機が生まれている．課題としてサッカーというボールゲームではすべての事象が異なるものである．どのような「パス」で攻撃が行われたのか．どのような「センタリング」，「ドリブル」で攻撃が行われたのか．どこの位置から攻撃がスタートしたのかなどサッカーというボールゲームの質的観点と本研究のような統計的な量的観点をより包括した研究を行うことが今後の課題である．